再会したエリート御曹司は契約彼女を
蜜愛で包み込む

目次

再会したエリート御曹司は契約彼女を蜜愛で包み込む　5

番外編　幸せの最中（さなか）　283

再会したエリート御曹司は契約彼女を
蜜愛で包み込む

プロローグ　そのプロポーズ、お受けいたしかねます

都心の夜景を一望できる高層階のフレンチレストラン。
本場フランス仕込みのシェフが手掛ける料理の腕は確かで、味もサービスも眺望も全てが完璧と言える。
――一緒に食事をしている相手も、またしかり。
窓際の席で食事を楽しむ桜庭詩乃は、テーブルを挟んで自分の向かいに座る男性を見た。
シャープな輪郭と高い鼻梁が印象的な彼は、薄い唇に微笑みを浮かべ、上品な美しさを漂わせている。それでいて、サイドに分けた艶のある黒髪の下から覗く切れ長の目には、妥協を知らない我の強さが見え隠れしている。
上品な獣といった表現が似合いそうな存在感で、右目の下にある泣きボクロは、整った顔の良いアクセントになっている。
細身な三つ揃いのスーツを優雅に着こなし、カトラリーを持つ長い指も、その所作も全てが美しい。
年齢は、今年二十六歳になる詩乃より七歳年上の三十三歳で、モデルや俳優と言われたらあっさり信じてしまうだけの華やかさがある。
とはいえ彼――一ノ瀬尚希の職業は、世界的シェアを持つ大手食品メーカー、イチノセ食品の営業部長で、かなりのキレ者らしい。
そして尚希は、そのイチノセ食品の御曹司でもある。
――容姿端麗で、仕事もできて育ちもいい。まさに完璧御曹司という言葉がぴったり。
詩乃としては、そんな彼が、いまだに自分の恋人を名乗るので複雑な心境にさせられる。しかも先ほどから聞かされる話が、なんともいえない内容なのでなおさらだ。
まあ彼との関係に関しては、自然消滅したものと思い込んで正式な別れ話をしなかった詩乃にも非があるのだけれど。
「失礼いたします」
女性スタッフが声をかけ、空になった彼のワイングラスに、新たなワインを注ぐ。
慣れた動きでワインを注ぎながら、スタッフは、詩乃と尚希を見比べる。
――尚希さんと一緒だと、場違いな服装の私が一段と浮いて見えるから恥ずかしい。
別に、誰かになにか言われたわけではないが、自分の身の丈に合っていない店で、極上のイケメンと向き合っているせいで、妙に後ろ向きな思考になってしまう。
食事に誘うなら、せめて事前に一言連絡が欲しかった。詩乃は周囲に悟られないようそっと息を漏らし、ガラスに微かに映る自分の姿を確認した。
家を出る時は外食の予定などなかったので、今日の詩乃は、着古したサマーニットとデニム素材

のラップスカートというカジュアルな服装をしている。
和菓子店の店長である詩乃は、職場ではユニフォームに着替えるので、仕事帰りの予定がなければ、いつもこんな感じだ。
そんな姿のため、尚希と向き合っていると、周囲に彼と自分がどんなふうに見えているのかが気になってしまう。
「詩乃、俺の話は理解できたか？」
尚希の声が、ネガティブな方に傾きかけていた詩乃の意識を現実に引き戻す。
視線を彼に戻すと、食事の手を止めワインが注がれるのを待つ尚希が、軽く首を傾けた。
ただそれだけの動きにも、大人の男の色気が溢れているためか、グラスを持つ女性スタッフの頬にわずかな赤みがさす。
詩乃はそんな女性の変化には気付かないそぶりで、尚希の質問に答える。
「つまり尚希さんが、近く専務に昇格され、ゆくゆくはお兄さんに代わって社長業を務めることになった。それに伴い、お母さまから縁談を勧められているけど、その相手がお兄さんの元婚約者……って、ことですよね」
レストランのスタッフが近くにいるため、イチノセ食品の社名を伏せて確認する。
それでもかいつまんで話した情報がなかなかに衝撃的な内容のためか、女性スタッフが目を大きく見開いた。
安物のドラマのような話に好奇心が抑えられなかったのか、女性スタッフは動きを止めて、ギャラリーと化している。
他人から視線を向けられることに慣れている尚希は、ギャラリーの存在を気にも留めずに会話を続ける。
「そうだ。だが俺としては、親の言いなりになる気はない。だから、五年間交際を続けている恋人と結婚したいと、親に告げた」
尚希がそこで一度言葉を切ると、女性スタッフが固唾を呑む。
一拍の沈黙を味わった後で、尚希は残りの台詞を口にする。
「詩乃、俺と結婚してくれないか？」
見目麗しい御曹司の、揺るぎない愛を誓うかのようなプロポーズ。
そんな状況に、女性スタッフが、やたらキラキラした眼差しを詩乃に向けてくる。
おそらく彼女は、周囲の反対を乗り越え、手に手を取って長年の愛を成就させる二人の姿を想像しているのだろう。
瞳を輝かせ、詩乃が『イエス』と答える瞬間を見届けようとしている彼女には悪いが、こちらとしてはその期待に応えるつもりはない。
ナプキンで口元を拭って、ニッコリ笑顔で返す。
「そのプロポーズ、お受けいたしかねます」
「えっ！」
詩乃の返答に、思わずといった感じで声を上げたのは、尚希ではなくスタッフだ。

よほど衝撃的だったのか、驚きのあまり彼女は手元を滑らせてワインのボトルを床に落とした。絨毯が敷かれているためボトルが割れることはなかったが、それでも床に落ちたボトルからワインが流れだしていく。

「も、申し訳ありません」

女性スタッフが慌ててしゃがみ込むと、他のスタッフも布巾を手にこちらへと駆けてくる。

その一連の動きに、尚希はチラリと視線を向けて『やれやれ』といった感じで肩をすくめるが、詩乃としては、誰のせいだとツッコミを入れたい気分だ。

久しぶりに恋人面で食事に誘ってきたかと思えば、なにを言いだすのだか。

――面倒ごとには関わらないのが一番。

既に食事を楽しむ雰囲気でもなくなっているので、詩乃はナプキンをテーブルに置いて椅子を後ろに引く。

「私を、尚希さんの家庭の事情に巻き込まないでください」

別れ話をするのを忘れていたというだけの理由で、御曹司のお家騒動に巻き込まれては困る。詩乃は、キッパリした口調で告げて立ち上がった。

手厳しくプロポーズを断られたというのに、尚希がそれを気にする様子はない。余裕たっぷりな表情を崩さず、詩乃を見上げて言う。

「五年前、先に家庭の事情に俺を巻き込んだのは詩乃じゃないのか？」

「うっ、ごもっとも……」

痛いところを突かれたと、詩乃は胸を押さえつつも必死に反撃の言葉を絞り出す。

「あの時のあれは、業務提携の引き換え条件だったはずです」

「そうだっけ？」

尚希は軽く首をかしげてとぼける。

そのまま顎に指を添えてこちらを見上げ、無言で詩乃の反応を待つ。

詩乃としてもその件に関しては、若気の至りとしか思えない後ろめたいことが多々ある。だから物言いたげな眼差しで見つめられると、居心地が悪い。

――これはきっと、尚希さんの作戦だ。

なにせ相手は、商談のプロ。こちらが気を許せば、そのまま自分のペースに乗せてくるに決まっている。

尚希が優秀なビジネスマンだと理解しているからこそ、こちらも及び腰になるわけにはいかないのだ。

「話がそれだけなら、これで失礼します。ついでにお互いのためにも、そろそろ恋人関係の解消をお願いします」

強めの口調でそれだけ言うと、詩乃はクロークで預けていた上着を受け取り、店を出た。

色々微妙な距離感ではあるが、彼が詩乃の恋人であることは事実。

この店を指定して呼び出したのは尚希の方なのだから、会計は彼に任せて問題ないだろう。一応の恋人として、詩乃は、尚希が支払いに女性が介入するのを嫌うことも知っている。

下手に支払いをすると、それを口実に連絡をしてきそうだ。
面倒ごとから逃げ出すべく早足で進んだ詩乃は、ちょうどその階に止まっていたエレベーターに乗り込む。
「そもそも五年間付き合ったって言っても、存在を忘れて別れずにいただけのくせに」
ゆっくり閉まっていくエレベーターのドアの向こうに、尚希が追いかけてくる気配はない。
自分たちの関係は、つまりその程度なのだ。
詩乃としては、だからこそ、愛情の欠片も感じさせないこのプロポーズが腹立たしい。
完全に閉じたエレベーターのドアにあかんべをして、詩乃は、降下していくエレベーターの中で今日の昼間のことを思い出す。

1　恋とプロポーズは忘れた頃にやってくる

都内オフィス街の片隅に店を構える春犀堂二号店。
そこの店長を務める詩乃は、新人バイト、山野内歩美の声に視線を上げた。
「え？　ごめん、もう一回言って」
今日は九月末日。
明日から、秋の和菓子の代表格とも言える栗羊羹の販売が始まるので、ショーケースの陳列を変えようと、しゃがみ込んであれこれ考えていた。
そのせいで、歩美の声を聞き逃したらしい。
「バイトの面接に来た時は、オフィス街の奥まった場所にある和菓子店なんて暇だと思ったのに、結構お客さんが来るんですね」
歩美の声には、忙しいことを残念に感じているとわかる響きがある。
大学三年生の彼女は、希望していた企業から早々に内定をもらい、卒業旅行の資金を貯めるべく最近ここでのバイトを始めたところだ。週三回、土曜と午後の講義がない火曜と水曜の遅番に入ってくれている。
就職活動を始めるまでやっていたバイトは居酒屋で、常に慌ただしい雰囲気だったという。それ

と比べれば、和菓子店なら暇だろうと期待していたのかもしれない。
歩美は長身で、顔立ちも大人びているので、どちらかといえば小柄で童顔な詩乃の方がバイトと間違えられることが時々ある。
「オフィス街だからこその需要もあるのよ」
残念でしたと苦笑して、詩乃は立ち上がり、歩美を見た。
「まあ、スーツ姿のイケオジを見られてけっこう眼福とか思ってるから、忙しいのもアリですけど」
歩美が、両手を胸の前でクロスさせて言う。
「イケオジ……眼福……」
黙っていると大人びて見える歩美だけど、話し方に若さを感じる。
――私も昔は、スーツ姿の男性は全員おじさんに見えていたもんね。
見えている世界が狭いから、どうしても視野が狭くなっていたのだ。
だから、あの頃のことは忘れてください。――詩乃がとある人物を思い出して心の中で静かに詫びていると、歩美が続ける。
「それに和菓子店って、思ったより男性のお客さんが多いのも驚きです。スイーツ男子、イケオジ界隈にも浸透しているんですかね」
「本店は、ここまで男性のお客さまは多くないわよ。ビジネス街だと、訪問先への手土産に買われる人も多いからじゃないかな」

詩乃は店内を見渡す。
この春犀堂二号店は、コンクリート打ちっぱなしの床に、白木の木材を使い、家具や調度品で和モダンな雰囲気を演出している。
ドアのガラス部分は大きく、開放感を出すために通りに面した窓も大きく取っているので、店内から外を行き交う人の姿がよく見える。
周辺は堅い職業の企業が多いためか、まだまだ暑いこの時季でも、男性はきちんとスーツを着ている人が多い。
ちなみにこの店にはイートインスペースもあり、四席あるテーブル席の奥にはガラスで仕切られた職人の作業スペースが設けられていて、タイミングが合えば職人の手作業を眺めながらお茶を楽しむことができる。
また、イートインでしか食べられないメニューもあり、それも好評だ。
「確かに老舗の和菓子って、手土産にちょうどいいんですよね。それに海外のお客さまが相手だと、ここで打ち合わせするのは、話のネタになって都合がいいみたいですし」
英語で会話をしているイートインスペースの客に、チラリと視線を向ける歩美の言葉に、詩乃が嬉しそうにする。
詩乃の実家の家業でもある春犀堂は、横浜に本店を構える江戸時代末期創業の和菓子店だ。
老舗と呼べる歴史を持ち、今でこそ十数名の職人と販売員を抱えているが、数年前までは売り上げが徐々に落ちていて、〝廃業〟の二文字が視野に入りつつある状況だった。

でも約五年前、詩乃の母親であり、今は本店の店長を務める桜庭幸恵が経営に携わるようになったことで状況は大きく変わった。幸恵は扱う菓子を高級志向に切り替え、大手食品メーカーと業務提携を結んで海外にも販路を拓いたのだ。

インバウンドの波に上手く乗ったことで売り上げが飛躍的に伸び、今年の初め、都内にこの二号店を構えるまでに至った。

「店長のお母さん、商売上手ですよね」

「そうね。……人の縁に助けられたっていうのもあると思うけど」

詩乃の反応がつい曖昧なものになってしまうのは、謙遜のためではなく、春犀堂の今があるのはとある人の助けがあったからだと本気で思っているためだ。

確かに、母の幸恵には商才があったのだろう。

だが、長年の経営不振に頭を悩ませていた春犀堂が、大手食品メーカーであるイチノセ食品と業務提携を結び、起死回生を果たすことができたのは、運の要素がかなり強い。

オフィス街に二号店を出すことができたのも、そうだ。

詩乃の家族は、都内に二号店を出したいと思いつつも、商業施設などの賃料の高さに二の足を踏んでいた。そんな時、ちょうどそれまで営業していた喫茶店が閉店し、今なら居抜きでこの店の契約ができると、イチノセ食品に勤める知人が仲介してくれたことで現在に至る。

全ては、彼がもたらしてくれた運のおかげだ。

ここ数年の春犀堂の歴史を辿っていると、どうしても、その〝彼〟の顔がチラつく。ついでに、

それに付随した思い出も……

――今となっては、あれは〝若気の至り〟とか、〝黒歴史〟ってヤツだよね。

普段、極力記憶から追い出すことにしている彼の存在を思い出し、詩乃は声を押し殺して唸る。

「あ、すごいイケメン登場」

どうにかして彼の存在を記憶から抹消できないだろうかと、詩乃が首を振っていると、歩美が声を弾ませた。

「こら、外に向かって指をささないの」

そう窘めつつ歩美の指さす方に視線を向けた詩乃は、路地を歩くビジネスマンの姿に息を詰まらせた。

細身なデザインの三つ揃いスーツを着こなした長身の〝すごいイケメン〟は、威風堂々とした足取りで春犀堂二号店へと近付いてくる。

久しぶりに見るその姿に、詩乃は、咄嗟に心の中で『ウチに来るな』と念じた。

だけどその願いも虚しく、彼はこの店のドアノブを握る。

「やったぁ」

その人がドアノブに手を触れさせたのを見て、歩美が声を弾ませた。

「いらっしゃいませ～」

歩美が愛想のよい声を上げる。

それなら接客は彼女に任せておこう。詩乃はクルリと回れ右して、用もないのに店の奥に入ろう

とした。
でもそれより早く、件のイケメンが詩乃に声をかける。
「詩乃、少しいいか？」
当然のように詩乃を下の名前で呼ぶイケメンの声に、歩美が「きゃ～」と甘い悲鳴を上げる。
その声に、イートインスペースにいる客がチラリとこちらを見るので恥ずかしい。
渋々再度回れ右をすると、すぐ目の前に歩美の顔があって驚いた。
「山野内さん、近い」
「て、店長、これどういうことですか？」
一応は仕事中であることを思い出したのか、声のボリュームをかなり抑えてくれているが、その分顔が近い。
「どうって……」
詩乃は歩美の肩を押して、距離を取る。
歩美はそれでも前のめりに顔を近付けて、「店長のカレシさんとかですか？」と目を輝かせて聞く。
――もし『そうです』って、答えたらどうなるんだろう？
一瞬、そんな悪戯心が頭を掠めるけど、過去の過ちとはいえ、それが事実なだけに認めるわけにはいかない。
「これはこれはイチノセ食品の一ノ瀬部長、ご無沙汰しております。本日は、どういったご用件でしょうか？」
親しげに名前を呼ぶんじゃない。――心の中で相手を叱りつつ、詩乃は〝すごいイケメン〟こと、一ノ瀬尚希に愛想笑いを浮かべた。
「なんだ、よそよそしいな。いつもどおり〝尚希さん〟でいいのに」
彼とは親しい間柄ではないと強調するため、わざとらしく社名と役職をつけたのに、尚希は揶揄い口調で答える。
尚希の意味深な表情に、歩美が頬に手を添えて甘い悲鳴を上げる。
「一ノ瀬部長、ウチが桜庭ばかりなせいで、つい私のことを名前で呼んでしまうのは理解しております。でもこの場に〝桜庭〟は私だけですし、バイトの子が勘違いしてもいけないので、普通に名字でお呼びください」
詩乃は頬を引きつらせ、唸るような声で尚希に釘を刺す。
それで多少は反省してくれたのか、尚希は軽く肩をすくめて話題を変える。
「実は春犀堂さんに、デパートからポップアップショップの打診が来ている。そのことで少し知恵を借りたい」
尚希はその証拠とでも言いたげに、提げていたビジネスバッグからクリアファイルを取り出した。
そうやって仕事であることを強調されると、詩乃としてもむげにはできない。
「そういったことは、本店の方に話を持っていっていただきたいのですが」
普段の尚希は、詩乃に仕事の話を持ちかけてくることはない。

だからなにかの用で彼が春犀堂に顔を出しても、詩乃は会釈するだけだったし、そもそも彼が部長に昇進してからは滅多に店を訪れることもなかった。

そして詩乃が二号店に移ってからは、完全な没交渉となっていた。

「本店に打診する前に、こちらで少しすり合わせをさせてくれ。久美子社長の承認を得るために、事前準備をしておきたい」

詩乃が一応の抵抗を試みるが、尚希はそれを聞き流した。

久美子とは、詩乃の母方の祖母のことで、名目上は春犀堂の社長を務めている。

詩乃の母であり、本店の店長である幸恵は、詩乃を産んですぐに価値観の不一致が原因で夫と離婚した。

その後は実家に戻り、菓子職人として春犀堂で働きつつ詩乃を育ててきた。だから、幸恵と久美子は血の繋がった実の親子であると同時に、共に店の暖簾を守ってきた仲間でもある。

久美子はまだ幼く手のかかる詩乃の子育てを手伝ってくれたし、幸恵は経営状況が厳しくなっていた春犀堂を立て直した。

その結果今があるのだから、お互いを認めればいいのだけれど、この二人、とにかく気が合わない。

長年一緒に商売をしているので、仲が悪いというわけではないのだけれど、世代間ギャップなのか、趣味嗜好の違いのせいか……

些細なことでも意見を対立させて、油断していると周囲を巻き込む騒動にまで発展させてしまうのだ。

創業家の直系で、現在も菓子職人を続けている祖父の存在が霞むほど、春犀堂では、日々二人が意見を対立させている。

長い付き合いでその辺の事情を承知している尚希としては、話の持っていき方を思案しているのだろう。

そして実は、詩乃と尚希が恋人関係にあるのも、この二人の意見が合わないことに起因している。

――おばあちゃんがらみか……

それなら、ここで話を聞かずに尚希を追い返せば、後々、幸恵と久美子の揉めごとに巻き込まれかねない。

自分の黒歴史の象徴としか思えない尚希とは、極力関わりたくない。だけど、祖母がらみなら仕方がないと、詩乃は自分を納得させる。

「ビジネスのお話でしたら、奥の事務所でお聞かせください」

突然のイケメンの登場に目を輝かせる歩美に、仕事であることをわからせるため、〝ビジネスのお話〟という部分を強調して、詩乃は尚希を店の奥に案内した。

「職場では下の名前で呼ばないでください」

スタッフの休憩所を兼ねた狭い事務所で二人きりになると、詩乃は尚希に文句を言う。

「春犀堂さんは、桜庭ばかりだって自分でも言っているじゃないか」

「でも二号店の桜庭は、私だけです」
片隅のポットでお茶の準備をする詩乃は、勝手に接客用のソファーでくつろぐ尚希をギロリと睨む。
詩乃より七歳年上の彼は、イチノセ食品という大手食品メーカーの御曹司で、出会った頃は営業企画部の主任だった。現在は同じ部署の部長を務めている。
年齢を考えれば将来有望なかなりの出世株だが、次男の彼に会社を継ぐ気はなく、気楽な立場を楽しんでいるのだという。
そのせいか、社会的地位もあるいい年をした大人なのに、悪戯好きのヤンチャ坊主といった感じが抜けない。
「家族全員と顔見知りだから、名字で話すと混乱する」
尚希がしれっと言い訳するが、その表情を見れば、適当なことを言っているだけだとわかる。
「だとしても『店長』とか、『詩乃さん』と敬称を付けるとか、やりようがあります。スタッフが私たちの関係を誤解するじゃないですか」
「誤解するもなにも、俺たちは恋人同士なんじゃないのか？　別れ話をした記憶はないぞ」
むくれる詩乃に、尚希は軽口を叩く。
尚希に言いたいことは山ほどあるのだが、そのとおりなので言い返せない。
詩乃が大学生の時に交際を始め、一時期は毎週のようにデートもしたこともある。でもその当時から現在に至るまで、二人の間に恋愛感情といったものは一切ない。

そして詩乃が就職する頃には、デートする必要もなくなっていたので、自然と疎遠になっていった。
――だから、わざわざ別れ話をする必要はないと思っていたのに。
春犀堂とイチノセ食品は業務提携をしているが、窓口は母の幸恵で、詩乃はノータッチだ。
なにかの拍子に遠目に見かけて会釈する程度だったので、詩乃としては、わざわざ別れ話をすると自意識過剰と思われそうなので触れずにいたのだ。
だけどそのことでこんな揶揄われ方をするくらいなら、きちんと別れ話をしておくべきだったのかもしれない。
――とはいえ、今は仕事の話が優先。
「さっきの資料見せてください」
尚希にお茶を出した詩乃は、彼の向かいに腰を下ろして手を差し出す。
「これだ」
尚希は詩乃に、先ほどチラつかせていたファイルを渡す。
詩乃がそれに目を落とすと、彼は黙ってお茶を飲み、持参したタブレットでなにかを読み始める。
資料を読み終わるまで、尚希は自分のことをして過ごすつもりらしい。
こういう時、気心の知れた関係というのは楽である。
「企画としては面白いと思うのだが、社長が嫌いそうな案件だろ」
詩乃が資料を読み終わったタイミングで、尚希が言う。

「確かに面白そうです。そしてこれは一般的な手順で進めた場合、確実にお母さんとおばあちゃんが揉めますね」

詩乃の意見に、尚希が苦笑する。

尚希が持ってきた案件は、最近人気のアニメとのコラボ企画だった。

ジャンルはゆるいグルメ系で、女子高生がバイト代を貯めては気ままな電車の旅に出かけて、各地のグルメを楽しむという内容だ。

作中、和菓子をテーマにした回もいくつかある。

その舞台が横浜だったこともあり、作品に合わせた和菓子の制作を春犀堂に依頼したいという。

菓子を詰めた箱には、そのアニメのステッカーを貼るそうだ。

単価条件も悪くないので、改革派の幸恵は新たなニーズの開拓に繋がると喜ぶだろう。逆に、新しいことへの挑戦に対して慎重な構えをとる久美子は、伝統の安売りになるのではないかと渋い顔をするのだ。

そして双方の虫の居所が悪いと、それをきっかけに、喧嘩を始める。

内容を確認して、詩乃はフムと考える。

「とりあえず、母にだけこの件を話しておいてください。おばあちゃんには、そのアニメを知ってもらうところから始めます」

詩乃もそのアニメは観たことがなかったが、原作の漫画なら何冊か読んだことがある。

優しいタッチの絵で、ほのぼのとした高校生の日常や、ご当地グルメが丁寧に描かれていた。

久美子は店の手伝いが忙しくて旅行に行けない分、旅番組やご当地料理を紹介するグルメ番組が好きなので、同居する詩乃がリビングでそのアニメを見ていれば自然と一緒に見るだろう。

そして内容を知ってもらった後で、コラボの話が来ていることを伝えれば、反応も違ってくるはずだ。

「ただし、その先の話の持っていき方は気をつけてくださいね」

詩乃は尚希に忠告する。

「と言うと？」

「先にお母さんが知っていたとなると、おばあちゃんが拗ねるからです」

「クッ」

詩乃の答えに、尚希が笑いを堪える。

いい年をした大人がなにをと思うかもしれないけど、桜庭家の場合、本当にその点を注意しておかないと後が大変なのだ。

母の幸恵は、間違いなくこのコラボ企画を受けたがる。

とはいえ、春犀堂の社長は祖母の久美子なので、彼女の承諾なしに、この企画を進めることはできない。

表向きの形としては、久美子がアニメの内容を気に入り、その後にちょうどコラボの話が来たということにしたい。

それでも久美子は伝統を重んじて変化を嫌う気質なので、興味を持ちつつも、すぐには決断しな

いだろう。
そこは詩乃も上手く説得するつもりではいるけれど、久美子が了承するまで待っていると、材料の手配や、製造ラインの調整をする幸恵の負担が大きくなる。
だから幸恵には事情を説明して、先に裏で準備を進めておいてもらいたい。
「両者の顔を立てるのには、このやり方が一番です」
詩乃の説明に、尚希は「なるほど」と納得する。
「おばあちゃんは、自分が納得する前に話が勝手に進むのが嫌で、ちょっと気難しいところはありますけど、一度納得すれば後になって文句を言ったりしないから安心してください」
詩乃の意見に、尚希はそうだったと笑う。
「確かに。ウチとの業務提携を決めた時も、反対したのは最初だけだったな」
当時のことを思い出したのか、尚希が懐かしそうに笑う。
彼の記憶に、無鉄砲だった昔の自分が含まれていると思うと、詩乃としてはなんとも落ち着かない。
「それじゃあ、そういうことでお願いします」
話はそれでおしまいと、詩乃は閉じたファイルを尚希に返して立ち上がる。
「もう店に戻るのか？」
ファイルをビジネスバッグに戻しながら尚希が聞く。
「店長として、仕事が山積みなんです。それに、早く戻らないと、バイトの子が私たちの関係を誤解してしまいそうなので」
そうなったのも全て、尚希のせいだ。
「誤解じゃないだろう」
「誤解ですっ！」
まだ話し足りないと言いたげな顔をする尚希を軽く睨んで、詩乃はツンと返す。
尚希だって忙しいはずなので、早く帰ればいい。
彼がイチノセ食品に就職したのは、どうしたって御曹司という肩書きがついて回るのであれば、いっそのことイチノセ食品でその手腕を振るいたいと思ったからだという。
自分がイチノセ食品に就職すれば、創業家の御曹司だからと、色眼鏡で見られることはわかっている。
気の強い彼は、そういった連中がやっかみの言葉を口にできなくなるほど、実力の差を見せつけてやろうと考えたのだ。
そして、その目論見通りの結果を出し続けているという。
「じゃあ、仕事帰りに食事をしないか？」
ビジネスバッグを手に立ち上がりながら、尚希が尋ねた。
「なんのためにですか？」
「恋人同士の語らいをするためだ。詩乃が就職してからこっち、そういう時間を持てずにいただろ」

尚希が澄ました顔で言う。
「なにを今さら」
詩乃が大学を卒業してから、何年経ったと思っているのだ。
「恋人になって五年、いつまでもこの中途半端な関係を続けるわけにはいかないだろ。ウチの経営体制について、少し話しておきたいことがある」
胡乱な眼差しを向ける詩乃に、尚希が苦笑する。
――もしかして、別れ話をしたいとか？
もともと愛のない関係なだけに、改めて二人の関係について話をすると言うのであれば、そのくらいしか目的が思いつかない。
詩乃はとっくに自然消滅したと思っていたのだけど、今日のように仕事で顔を合わせることもあるので、尚希としてはけじめをつけておきたいのだろうか。それで相手がスッキリするなら断る理由はない。
「わかった」
「今日のシフトは？」
詩乃が頷くと尚希が聞く。
「早番です」
「そうか。じゃあ、店を予約しておく」
尚希は、時間や店の場所は後でメッセージを送ると告げると、使った湯飲みを流しに片付けて事務所のドアの前に立つ詩乃の方へとやってくる。
――尚希さんは、こういうところがちゃんとしてるから憎めないんだよね。
社会的立場を考えれば、尚希は湯飲みをそのままにして帰ってもいいと思うのだけれど、彼はこういったさりげない気遣いを自然とやってのける。
以前、会社では立場に見あった振る舞いを心がけていると話していたので、彼のこういった何気ない気遣いを知るのは詩乃だけなのかもしれない。
そう思うと、よくわからない優越感のようなものが疼く。
ドアの前に立つ詩乃は、油断するとニヤけてしまいそうなので、奥歯を噛みしめることで難しい表情を作った。
詩乃の前で足を止めた尚希は、ジッとこちらを見つめてくる。その距離が想定外に近いので驚く。
「なにか？」
彼との距離感に居心地の悪さを覚えて聞き返すと、尚希が自然な動きで詩乃の頭に手を置いた。
――えっ？
大きな手の感触に詩乃の心臓が大きく跳ねるが、尚希はそのまま詩乃の頭をポンポンと軽く叩いた。
「久しぶりに顔を見られて嬉しいだけだ。……じゃあ、今晩。仕事の邪魔をして悪かったな」
親しみを感じさせる声でそう告げて、尚希は軽く手を上げて事務所を出て行く。
パタンッとドアが閉まると、詩乃は尚希の手の感触が残る自分の頭を押さえた。

「そういう思わせぶりな言い方、絶対良くないと思う」
自分の髪をクシャリと撫でる触れ方で、彼が自分を子供扱いしているのだとわかる。
詩乃としては、それが腹立たしい。
「私だって、もう大人なのに」
年齢差に加え、出会った頃の詩乃が大学生だったこともあり、尚希がいつまでも詩乃を子供扱いしてくるのが腹立たしい。
――でもその苛立ちの原因は、深掘りしちゃダメ。
詩乃は軽く頭を振って、モヤモヤした思いを思考の隅に押しやり、店に戻った。

その日の仕事終わり、詩乃は、尚希が指定したレストランへと向かった。
尚希が待ち合わせの場所に選んだのは、品川駅近くの商業ビルに入っているフレンチレストランだった。春犀堂本店を兼ねた神奈川の実家から通っている詩乃が帰りやすいように、配慮してくれたのだろう。
――全てにおいてそつがない。
時々、悪ガキのようなノリで詩乃を揶揄ってくることはあるが、普段の尚希は、その肩書きに見あった良識ある大人なのだ。
そのうえ容姿端麗で、仕事ができて育ちもいいので、〝完璧御曹司〟としか言いようがない。
「お連れさまより、少し遅れるとのご連絡を承っております」

詩乃を窓辺の席に案内したスタッフが告げる。
その件に関しては、先ほど詩乃のスマートフォンにも本人からメッセージが届いていた。
会議が長引いているとのことだ。
伝言のお礼を言って着席すると、注文した覚えのないグラスシャンパンと、サーモンのマリネを使ったアミューズ・ブーシュが運ばれてきた。
待たせる詩乃へのお詫びに、尚希が頼んでおいたのだろう。
常に仕事が忙しい尚希は、昔からよく待ち合わせに遅刻していた。そういった際は、いつもこうやって詩乃に気を遣ってくれるのだ。
「尚希さん、本当に完璧」
どちらかといえば不器用で、家柄も学業の成績も平々凡々といった感じの詩乃では、どう考えても彼の恋人としての釣り合いが取れていない。
だから詩乃は、彼とはとっくに別れていると思っていたのだ。
恋人とはいっても、最初から二人の間に恋愛感情が存在していないのだからなおのこと。
微妙な思いでシャンパンを一口飲んだ詩乃は、テーブルに頬杖をついて二人が恋人関係になった経緯を思い出す。

◇◇◇

尚希との出会いは五年前、詩乃がまだ大学生だった頃だ。

当時の春犀堂は老舗と言えば聞こえはいいが、徐々に客足が減少傾向にあった。その経営立て直しに奔走していた幸恵が、どこでどう知り合ったのかは知らないが、彼を連れてきたのが始まりだった。

当時イチノセ食品の営業企画部で主任を務めていた尚希は、厳選した高級な日本食を海外に売り出すプロジェクトに参加しており、企画の趣旨に合う和菓子店を探していたのだという。

春犀堂本店の二階にある桜庭家の客間に招き入れられた尚希は、「海外で、和食文化の需要が高まる中、〝海外のお客さまが最初に出会う和菓子が春犀堂〟という道筋を作るチャンスです」と熱弁し、イチノセ食品との業務提携を提案した。

既に広い海外シェアを確立させているイチノセ食品ではあるが、和菓子製造は手掛けていなかった。そこで、新たに和菓子製造部門を作るのではなく、老舗の暖簾を借りて業務提携しようという話になったらしい。

尚希は、当時店の主だった詩乃の祖父、太一郎に和菓子の奥深さについて熱弁した。その上で、和菓子は一朝一夕で真似できるようなものではないからこそ、春犀堂の協力を得たいと訴えた。

結果、体調を崩し弱気になっていた太一郎の気持ちはイチノセ食品との業務提携に傾いたのだけれど、久美子がそれを許さなかった。

「ウチに歴史があるってんなら、昔ながらの伝統を守るのが筋ってものじゃないか」

そんなことを言って、業務提携に猛反対したのだ。

幸恵は、イチノセ食品と業務提携を結ぶのを機に、始業や終業時間が曖昧なまま職人や家族が働く、昔ながらの店の態勢を改めようとしていた。同時に、量産態勢を取るよう製造部門の改革まで目論んでいたのだ。久美子としてはそれが面白くなかったらしい。

これまでの自分のやり方を否定されたと錯覚した久美子が猛反対し、このままでは店が潰れると幸恵が反論したことで派手な親子喧嘩に発展した。

店主である太一郎そっちのけで過熱していく親子喧嘩の末に、話がどう転んだのか、久美子は店の若い職人を詩乃の婿養子に迎えて店を任せればいいと言い出した。

そうなったら売り言葉に買い言葉。

たまたまその場に居合わせたという理由だけで、幸恵が詩乃に、尚希と結婚を視野に入れた交際をしてはどうかと言いだし、どうにか騒ぎの収拾をつけたい太一郎が、最終判断を詩乃に一任した。

当時まだ大学生で、異性との交際経験もない詩乃としては、とばっちりでしかない。

もちろん太一郎は、幸恵と久美子のいない場所で「その場を収めるためにああは言ったが、どちらも選ばなくていいし、子供は店の心配なんてしなくていい」と言ってくれた。

だけど子供の詩乃にも、このままでは店が立ちゆかなくなるのが目に見えていた。

それで数日間悩んだ末に、詩乃は祖母の勧める職人ではなく、尚希を選んだ。

別に尚希に特別な感情はなかったが、その方が店のためになると思ったからだ。あと、久美子が婿養子にと勧めてくる職人がすっかりその気になっていて、困っていたという事情もあった。

「あの人より、あなたの方がマシだから、しばらく恋人のフリをしてくれるならイチノセ食品さん

との業務提携を選んであげます」

商談を進めるのなら、店が潰れかけていると悟られてはいけない。――そんな思いや、上手く言えない気恥ずかしさから、詩乃はもらっていた名刺にあった連絡先で呼び出した尚希に、かなり上から目線な態度で偽の恋人関係を提案した。

普通なら、失礼だと怒られてもおかしくない話だ。

だけどそれを聞いた尚希は、気を悪くするどころか、大笑いして、「そんな口説き文句で交際を申し込まれたのは初めてだ」と話し、詩乃の提案を了承してくれた。

◇◇◇

――無知って恐ろしい。

若かりし日の自分の言動を思い出して、詩乃は頬を引きつらせる。

当時の詩乃は、選択権を委ねられている自分には、尚希と対等に交渉する権利があると思い込んでいた。

なんだったら、イチノセ食品から業務提携を願い出ているのだから、春犀堂の方が優位な立場にあるとさえ勘違いしていた。

だから、店のためにも強気で交渉しなくてはいけないと思い、尚希に上から目線で恋人役を頼んだ。

だが実際は、尚希の側は、それなりの歴史がある店の暖簾を借りられるのであれば、春犀堂に固執する必要はなかったのだ。

でも春犀堂の方は、あの時イチノセ食品との業務提携の話が流れていたら、経営はかなり厳しいものになっていただろう。

詩乃が店長を務める二号店だって、イチノセ食品との業務提携で安定した資金調達ができているおかげで開けたのだし、その場所を紹介してくれたのも尚希だ。

今になって思えば、尚希には最初から春犀堂の経営状況などお見通しだったのだろう。イチノセ食品ほどの規模の会社が、業務提携を提案する前に、相手の経営状況を確認しないわけがないのだから。

そういった大人の事情を理解できるようになった今、あの日、業務提携を交渉のネタに、尚希に恋人役を頼んだ詩乃の行動は黒歴史でしかない。

面倒くさい小娘がいる和菓子店なんて見限って、他の業務提携先を探しても良かったのに、尚希は嫌な顔をすることもなく詩乃の恋人役を引き受け、件の職人が店を辞めるまで恋人のフリを続けてくれた。

――そんなことされたら、普通……

「悪い、待たせたな」

そんな声に視線を向けると、尚希が立っていた。

「私もさっき来たところです」

詩乃があまり減っていないシャンパングラスを掲げると、尚希は薄く笑い、案内してくれたスタッフに椅子を引かれて向かいに腰を下ろす。
「だとしても、悪かった。今社内がかなりごたついていて、話し合いが思うように進まなくて手を焼いている」
――社内がごたついている？
なにか大きなトラブルでも発生したのだろうか。
尚希はそれ以上そのことには触れず、詩乃の希望を確かめつつ、アラカルトで料理を注文していく。
慣れた様子でフランス語のメニューを指さし、スタッフと言葉を交わす尚希の姿を、詩乃はどこか他人事のような気持ちで眺めていた。
学生時代はなんとなく、スーツを着ている人は全員おじさんというイメージがあった。だけど自分が社会に出て価値観が変化すると、尚希は洗練された大人の男であっておじさんではないと気付かされる。
――だから今さら、恋人を気取るつもりなんてなかったのに。
尚希に恋人役を頼んだ当時、祖母が勧めた職人の方は、二人の交際に納得していなかった。それが恋愛感情に基づくものならともかく、詩乃を丸め込めば店が自分のものになるという腹黒い下心が透けて見えたのでたちが悪い。
それを察した尚希が、詩乃が母の案を選んで自分と交際を始めたと周囲に強くアピールした方がいいと話した。
それで二人の交際が順調だと信じてもらうために、尚希は、デートの真似ごとのようなことに詩乃を頻繁に連れ出してくれたのだ。
当時、スイーツ部門の開拓に携わっていた尚希は、『若い女性に人気のスポットに男が一人で行くのは気が引けるから、付き合ってくれると助かる』と話していた。それで、〝デート〟と称して、たびたび二人でスイーツの食べ歩きに出かけたのだ。
今思えば、それは詩乃が遠慮しないよう気遣った尚希の嘘だったのかもしれない。
もちろん体の関係はなかった。尚希から見れば、大学生の詩乃など子供にしか見えないのだから当然だ。
だけど、まだまだ恋と憧れの区別もつかないお年頃の詩乃は違った。
そうやって毎週のように素敵な男性と出かけていれば、どうしてもドキドキしてしまう。彼の何気ない仕草に、一度もときめかなかったといえば嘘になる。
だが、彼と一緒にいる時に胸に湧く感情の正体を確かめる前に、件の職人が春犀堂を辞めた。
そうなれば、詩乃と尚希が恋人同士のフリをする必要がなくなる。
ちょうど詩乃が大学を卒業するタイミングで、尚希も部長に昇進して忙しくなったので、自然と疎遠になっていった。
春犀堂とイチノセ食品が提携している関係で、時折顔を合わせることはあっても、話をするのは幸恵で、詩乃は会釈する程度だ。

だから詩乃としては、この先も過去の黒歴史には触れず、ビジネスライクに適切な距離を保っていくつもりでいた。

――だから今さら、こんなふうに改まって別れ話をしなくても良かったのに。

そう思う反面、尚希に声を掛けてもらいでもしない限りこんな名店に来ることもないので、このお誘いが嬉しくもある。

彼が自分を呼び出した目的が別れ話だと決めつけている詩乃は、それならそれで最後の思い出にこの晩餐を楽しもうと、気持ちを切り替える。

「ところで、詩乃を食事に誘った理由なんだが……」

飲み物をシャンパンからワインに切り替えて、料理を楽しんでいる途中で尚希が切り出す。

それまで些細な会話で盛り上がっていた詩乃は、本来の目的を思い出し、手にしていたナイフとフォークを皿に預けて話を聞く姿勢を取った。

「まだ口外してほしくないんだが、兄がイチノセ食品を退職した関係で、近く俺が専務に就任することが決まった」

「えっ」

尚希の話に、詩乃は微かな驚きの声を漏らした。

それなりに長い付き合いなので、尚希が次男であることや、イチノセ食品は彼の兄が継ぐ予定だということは知っている。

そのため彼の両親――特に母親の関心は兄に集中していて、次男の尚希は放任され気楽な立場にいるのだとか。

「こちらとしては青天の霹靂なんだが、兄の方はかなり前から周到に準備していたらしい。長期休暇を申請して海外旅行に出かけたと思ったら、個人的に雇った弁護士を通じて辞職を願い出た。向こうで働く会社も既に決まっているそうだ」

ちなみに家族宛に、一ノ瀬家の相続などに伴う全ての権利を放棄するから、自分の好きにさせてほしい、といった内容の書面も送られてきたのだという。

「それは、大変ですね」

詩乃の同情の言葉に、尚希は顔を顰める。

「そのせいで、俺が後を継ぐ流れになった。もともとは家業に特別な思い入れがあったわけじゃないが、就職して約十年、それなりにイチノセ食品への愛着が育ってしまったからな。他の誰かに社長の座をくれてやるくらいなら、俺が継ごうと考えたわけだ」

尚希が頬杖をついて、やれやれといった感じでため息をつく。

「他の誰かにくれてやるくらいなら……、尚希さんらしい意見ですね」

黙っていれば完璧御曹司なのに、打ち解けて話すと、変なところで子供っぽい。

詩乃の知る尚希は、そういう人なのだ。

「そして社長になる以上、さらなる飛躍を目指すんですよね」

彼の人柄をよく理解している詩乃がそう付け足すと、尚希は器用に片方の唇だけを持ちあげて笑う。

自惚れた態度と受け取られかねないが、尚希なら結果を出すので問題ない。少なくとも詩乃は、そう思っている。

「そんなわけで、後継者になるのは納得しているんだが、アニキがいなくなった途端、母親が急に俺の私生活にまで口を出すようになって迷惑している。日々の言動はもとより、俺の結婚相手にまで口出ししてくる始末だ」

「なるほど」

「そのやり取りで、俺には恋人がいたことを思い出してな……」

そう言って、尚希は詩乃を指さす。

つまり、兄の出奔で突如イチノセ食品の後継者に決まった尚希は、その立場に相応しい女性と結婚することにしたのだろう。

尚希の性格を考えれば、さすがに政略結婚ということはないだろうけど、それでも大企業のご令嬢といった、次期社長の妻として相応しい相手と結婚するに違いない。

――忙しいんだから、律儀に私に報告しに来なくてもいいのに。

今となっては、尚希に恋人役を頼んだことを黒歴史とさえ考えているのだ。今さら別れ話などされなくても、詩乃は彼の結婚を喜んで祝福する。

だからそのまま祝福の言葉を口にしようとした詩乃に、尚希はとんでもないことを言う。

「それで母には、『俺は長年付き合っている恋人と結婚する予定だ』と言っておいた」

「はい？」

自分はなにか大事な情報を聞き逃したのだろうか？

理解不能な言葉を聞かされた気がする。

「あの……つまり、尚希さんには、私の他にも恋人がいたということでしょうか？」

彼が自分なんかにプロポーズするはずがない。だから、そういうことだろうと、詩乃は判断する。

もちろんそうだとしても、それを浮気だなんだと騒ぐつもりはない。

相手が自分以外の誰であっても、詩乃は喜んで祝福する。

それなのに尚希は、「失礼な」と軽く片眉を跳ねさせた。

「もし他に誰かいれば詩乃と別れてから付き合う。そもそもずっと仕事が忙しかったんだから、そんな時間あるか」

「なるほど」

確かにそうかもしれない。

尚希がかなりのキレ者であることは、幸恵から聞かされたことがあるし、三十代前半で部長職に就いている状況を見ればわかる。

そして負けず嫌いである彼は、立場に見あった結果を出し続けるために忙しくしていたのだろう。

「詩乃、そういうわけだから、俺と結婚しないか？」

何食わぬ顔で詩乃にプロポーズして、尚希は食事を再開する。

そんな尚希の動きを真似て、詩乃もナイフとフォークを再び手にして肉を切り分けていく。

手を動かすことでどうにか気持ちを落ち着け、上目遣いに相手の様子を窺うと、彼はなにごとも

なかった様子で食事を楽しんでいる。
——もしかしてこれは、尚希さんなりの冗談？
先ほど彼自身が、『恋人がいたことを思い出した』と話していた。詩乃同様、彼も二人の関係をその程度にしか捉えていなかったのに、プロポーズなんてありえない。
「尚希さん、ギャグのセンスなさすぎです」
おそらく退職した兄に代わって尚希が後継者になることや、母親に立場に見あった縁談を勧められているというのは事実で、最後のプロポーズは、話が重くならないようにおまけで付け足した冗談なのだろう。
ワインを飲む尚希が、首をかしげる。
「ギャグ？」
「私にプロポーズとか、ありえないですよ」
「それは本気だ。しかも母が縁談を勧めているのは、アニキの元婚約者ときている。そんな女性と結婚する方が、ありえないだろう」
そう言って尚希は、空になったグラスをテーブルに置く。
しかもその元婚約者の家とは、将来的に彼女が尚希の兄と結婚することを前提に、家族ぐるみの交流があったという。そこまでくると、婚約者というより許婚だ。
「それは……確かにありえないですね」
突然、兄の婚約者だった女性と結婚しろと言われて尚希が戸惑うのはわかる。だからといって、

それを理由にプロポーズされても詩乃が迷惑だ。
グラスが空になったことに気付いた女性スタッフが歩み寄り、「失礼いたします」と声をかけて、テーブルに置かれていたワインボトルとグラスを手に取る。
そのまま慣れた手つきでグラスにワインを注いでいく。
その動きを視界の端で捉えながら、尚希は詩乃に尋ねた。
「詩乃、俺の話は理解できたか？」
無視しようかとも思ったけど、もう一度同じ話をされても混乱が増すばかりなので、仕方なく頷く。
「つまり尚希さんが、近く専務に昇格され、ゆくゆくはお兄さんに代わって社長業を務めることになった。それに伴い、お母さまから縁談を勧められているけど、その相手がお兄さんの元婚約者……って、ことですよね」
改めて言葉にしてみると、なかなかに衝撃的な内容である。
そのため、ワインを注いでいたスタッフの女性がフリーズしているが、尚希は気にする様子はない。
「そうだ。だが俺としては、親の言いなりになる気はない。だから、五年間交際を続けている恋人と結婚したいと、親に告げた。詩乃、俺と結婚してくれないか？」
まるでドラマのワンシーンのようにプロポーズの台詞を口にする。
その様子に、ギャラリーを用意することで話を自分の望む流れに持っていこうとしている尚希の

意図を察して、詩乃は警戒心を強めた。
チラリと視線を向けると、ワインボトルを手にした女性スタッフは、瞳を輝かせて詩乃を見ている。
ドラマチックなプロポーズの立会人になるつもりでいるのなら、申し訳ないが、その希望には応えられない。
詩乃は、口元をナプキンで拭いて微笑む。
「そのプロポーズ、お受けいたしかねます」
「えっ！」
スタッフが驚きの声を上げた。
よほど動揺したのか、手にしていたボトルを落として、床に紅のシミを広げていく。
「も、申し訳ありません」
ボトルを落としたスタッフが慌ててしゃがみ込み、周囲が慌ただしくなるが、尚希は気に留める様子もなくそのまま話を進めようとする。
――これ以上ギャラリーが増えた状態で、この話をしたくない。
「私を、尚希さんの家庭の事情に巻き込まないでください」
立ち上がった詩乃は、ピシャリと釘を刺すが、敵も負けていない。余裕たっぷりな口調を崩さずに言う。
「五年前、先に家庭の事情に俺を巻き込んだのは詩乃じゃないのか？」

ごもっともである。
店の経営方針を巡り母と祖母が対立した際、かなりの上から目線な態度で、尚希に恋人になれと迫ったのは詩乃の方だ。
でも、だからといって、恋人のフリと結婚では人生の重みが違う。
これ以上関わらない方がいいと判断した詩乃は、まだ続きそうな話を強引に振り切り、尚希をその場に残して店を後にした。
そしてその足で駅に向かい、タイミングよくホームに入ってきた横浜方面の電車に飛び乗る。
動き出す電車の中、空いていた席に腰を下ろした詩乃は、バッグから取り出したスマホをチェックして顔を顰めた。
『俺と結婚したくないと言うなら、もちろん無理強いはしない。ただせめてしばらく、今度は詩乃が、俺の恋人役を引き受けてくれてもいいのでは？』
文字だけで綴られた尚希の素っ気ないメッセージに、詩乃はぐぬぬと眉を寄せる。
「そんなことだと思った」
尚希ほどの男性が、本気で詩乃にプロポーズするわけがない。
おそらく兄の元婚約者とかいう女性との縁談を断る口実に、自分には恋人がいると主張することにしたのだろう。そして、詩乃と別れ話をしていなかったことを思い出しただけなのだ。
――尚希さんは、私になら恋人役を頼んでも後々面倒が起きないと思っているんだろうな……

五年前ならいざ知らず、彼と自分の家柄や社会的立場の違いを理解した今、詩乃もそれを不満だと口にしないだけの思慮は持ち合わせている。

もちろん詩乃は、自分が本当に彼の恋人になれるなんて思ってもない。

だからこそ、面白がってなのか、交渉の取っかかりにしたかったのかはわからないが、その気もないのにプロポーズなんかしてくることが腹立たしいのだ。

きっと彼は普段から、こんな感じで交渉相手を翻弄して、自分が望む答えを引き出しているのだろう。

つくづくそつがなくて、腹立たしい。

詩乃はどちらかと言えば、そういった感情の駆け引きが下手で、思ったことをすぐに口にしてしまう。それで面倒なことになることもしばしばあるので、全てにおいて如才なく立ち回る尚希が羨ましかった。

「私とじゃ、人間の格が違う」

それなのに、子供じみた思考回路で、彼に恋人役を演じさせていたことが恥ずかしい。だから疎遠になったのを機に、詩乃のことなど忘れてくれても良かったのだ。

そう思っていたのに、今さら、恋人関係にあったことを蒸し返されても対応に困る。

「どうしようかな？」

詩乃は画面を見つめて唇を尖らせる。

メッセージを開いた段階で既読マークがついているので、尚希には、詩乃が画面と睨めっこしていることなどお見通しなのだろう。

だとしたら、受けるにしても断るにしても、早くメッセージを返した方がいい。

そう思っていると、尚希から次なるメッセージが届いた。

『あと、誰でもいいわけじゃなく、俺は詩乃だから頼んだんだ』

なかなかの殺し文句である。

優秀なビジネスマンである彼は、交渉相手のツボを押さえるのが上手い。

しかも今回売り込む品は、極上の御曹司なのだから、強くアピールされれば、こちらとしては断るのが難しい。というか無理だ。

自分の負けを認めるように深くため息をついた詩乃は、唇を尖らせて画面の上で指を動かす。

『仕方ないから、引き受けてあげます。一応、まだ恋人だったみたいなので』

自分のほのかな恋心が悟られないよう、ツンとした口調で返す。

ついでに子供扱いされないよう、スタンプをつけるのも控えておく。

そうやって精いっぱい彼と対等になれるようにと頑張っているのに、尚希からは感謝を伝えるスタンプが返ってきた。

「こんな可愛いスタンプ、普段誰に送ってるのよ」

それこそ詩乃に詮索する権利がないことなのに、妙な嫉妬心が疼いてしまう。

悔しいので認めないようにしているだけで、今も詩乃は、尚希に憧れに近い微かな恋心を抱いているのだ。

それがいつ頃芽生えた感情なのかはよくわからないけど、彼が自分を恋愛対象として見ていないのは、最初からわかっている。

昔、詩乃の恋人役を引き受けたのだって、子供が生意気言うのを面白がってのことなのだ。

その証拠に、一時期はそれなりの頻度でデートらしきことをしていたのに、そういった雰囲気になったことは一度もない。

だから、恋と認めれば失恋確定のこの想いとは、あえて向き合わないようにしてきた。

それなのに、今さら恋人役を頼んでくるなんて。もし万が一にも、本気の恋に落ちたらどう責任を取ってくれるのだ。

「そうなったら、本気で結婚を迫って困らせてやる」

相手に声が届かないのをいいことに軽口を叩いて、詩乃はスマホをバッグに戻した。

◇◇◇

「仕方ないから……か」

一人暮らしをする都内のマンションに戻ってきた尚希は、帰りのタクシーの中でやり取りしていた詩乃のメッセージを読み返して小さく笑う。

ぶっきらぼうなメッセージを読むだけで、不満げに唇を尖らせる詩乃の顔が思い浮かぶ。

五年前、春犀堂を訪れた際に渡していた名刺から連絡して、尚希を呼び出した時も、詩乃は不満げに唇を尖らせて、『あなたの方がマシだから』と恋人役を頼んできた。

自惚れる気はないが、悪くない見た目に育ちの良さが手伝って、昔から女性にはかなりモテていた。

就職してからは、イチノセ食品の御曹司という立場も手伝って、ビジネスの場においても常に一目置かれる存在だった。

もちろんやっかみの言葉を受けることもあったが、気の強い尚希はそれらがただの負け惜しみにしか聞こえないほどの実力を見せつけ、結果を残し、相手を黙らせてきた。だが、次第にそれはそれで新たな嫉妬を生むだけだと理解した。

そうやって愛情、賞賛、嫉妬と様々な感情を人から向けられることに慣れきっていた尚希に、詩乃は、渋々といった様子で恋人役を頼んできたのだ。

大学生の彼女からすれば、自分はなんの面白みのないサラリーマンだったのだろう。

たぶん当時の尚希は、周囲に求められるままに結果を出しても、やっかみと期待が果てしなく増長していく状況に少し疲れていたのだろう。

イチノセ食品の御曹司としてではなく、一人の人間として自分を評価した上で、おべっかを使うどころか、少々不満げに恋人役を頼む詩乃の正直さに妙に癒やされたのだ。

それで、気分転換に親戚の子供の遊び相手をするような気持ちで、詩乃の恋人役を引き受けたのだ。

騒動の始まりが、尚希が春犀堂に業務提携の話を持ちかけたことにあるので、それを申し訳なく

思ったというのもある。

イチノセ食品としては、業務提携先を春犀堂に絞る必要はなかったのだが、大人の事情に子供を巻き込んでおいて見て見ぬフリというのも後味が悪い。

それに少し話をすれば、彼女なりに店のこの先を心配しているというのも伝わってきたので、余計に無視できない。

そんな理由で引き受けた恋人役なので、もちろんそこに恋愛感情はなく、若い女性が喜ぶ可愛らしい飲食店の市場調査も兼ねて、そういう場所に詩乃を連れ出していただけである。

「そのつもり、だったんだけどな……」

スマホをテーブルに置いて冷蔵庫から冷えた水を取り出した尚希は、それを一口飲んで唸る。

詩乃の恋人役を引き受けたことで春犀堂との業務提携が決まり、それを足掛かりに売り上げが右肩下がりだった春犀堂は経営を立て直した。イチノセ食品も海外に新たな日本食文化を印象付けることができ、その功績もあり尚希は部長に昇進した。

双方がそういった結果を出す頃には、久美子が婿養子にしてはどうかと話題にした件の職人は店を辞めていて、尚希がデートに誘っても詩乃に断られるようになっていた。

尚希に恋人役を頼む必要がなくなり、詩乃も大学を卒業した頃だったので、お役御免になったのだろう。

もしかしたら、好きな人でもできたのかもしれない。

成長すれば人は変わるものなので、それは自然な流れと言える。

立ち読みサンプル
はここまで

だから一度は没交渉になっていたのだが、最近になって、かねてより幸恵から相談を受けていた新店舗の開店に良さそうな物件を紹介するために、久しぶりに春犀堂を訪れ、詩乃に再会した。

部長に昇進したことで、春犀堂の担当は別の者に移っていたし、打ち合わせなどは幸恵の仕事だったので、詩乃がイチノセ食品を訪れることはなかった。

幸恵から雑談程度に詩乃の近況を聞くことはあったので、なんとなく今でも彼女とそれなりに繋がっているつもりでいた。

そんな錯覚も手伝って、先日店を訪れた尚希に気付き、遠目に会釈してくる詩乃を見て不思議な感覚に襲われた。

一気に大人びていたのもそうだが、よそよそしい態度をとる彼女の姿に、自分だけ時間の流れに取り残されたような妙な疎外感を覚えたのだ。

出会った頃はまだまだ子供といった印象が強かったため、大人になったと理解していたはずでも尚希の頭の中にある詩乃と現実の彼女の乖離（かいり）は激しい。そしてそのズレに、なぜだか一抹の寂しさを覚えた。

心のどこかでその思いを引きずっていたのか、兄が家を出た途端自分に過干渉になり、結婚相手まで指図してくる母に嫌気がさしていた時、その縁談を断る口実になぜだか詩乃の存在を口にしていた。

最初は無意識に『長年付き合っている恋人が……』と口にしていたが、不思議と詩乃を巻き込むのも悪くないと思えてきたのだ。